

〈学術論文〉

## 中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

杉山俊一郎 信州大学学術研究員教育学系

キーワード：中学校国語教科書，コーパス，助詞，文章ジャンル

### 1. 本稿の目的

『中学校学習指導要領（平成29年告示）』第2章第1節（国語）に拠れば，助詞の指導は，第2学年〔知識及び技能〕の（1）オ「単語の活用，助詞や助動詞などの働き，文の成分の順序や照応など文の構成について理解するとともに，話や文章の構成や展開について理解を深めること。」（p.33）に位置付き，その解説編では，助詞が「単語と単語との関係を示したり，意味を添えたりする働きをもつ品詞である」こと，助動詞とともに「互いの伝え合いたい微妙なニュアンスを，相手によりよく伝えることができることに気づかせることが重要」なこと，「『について』，『に関して』などの助詞と同じ働きをもつ語句や，『かもしれない』，『に違いない』などの助動詞と同じ働きをもつ語句について，文脈の中でどのような働きをしているかに注意して，話や文章の中で使うことができるようにすることが重要である」ことなどが記されている（p.78）。

これを踏まえ，現行の中学校第2学年の検定国語教科書では，以下のようなコラムと巻末解説を設けて助詞の概要がつかめるよう図られている（表1）<sup>1</sup>。

表 1 中学校国語教科書における助詞の取り扱い

東京書籍	【コラム】「文法の窓2 助詞 文よ，助詞で大きく育て」 p.113 【巻末解説】「文法解説 助詞」 p.260-
教育出版	【コラム】「文法の小窓3 付属語のいろいろ」 p.237 【巻末解説】「文法3 付属語のいろいろ」 p.299-
三省堂	【コラム】「文法の窓2 助詞・助動詞のはたらき」 p.153 【巻末解説】「文法のまとめ 2 助詞・助動詞のはたらき」 p.232-
光村図書	【コラム】「文法への扉3 一字違いで大違い」 p.215 【巻末解説】「文法3 付属語」 p.244-

しかし，当然ながら，これら限られたコラムの中で助詞を取り扱うだけでは，生徒自身が助詞の働きを理解し，各自の話す・聞く・読む・書く生活にその知識を生かせる段階にまで到達するには不十分である。知識の活用に至るまでには，実例によってその意味・用法を観察し，次に自分自身でも使用してみる経験が必要であって，そのためには，読解指導，作文指導をはじめとする各指導場面においても継続的に取り扱ってゆくべきものと考えられる。

<sup>1</sup> いずれも令和2年2月20日検定済，令和3年発行の教科書に拠る。

ただし、ここで考えなければならないのは、それぞれの助詞の使用状況は、指導に際していつでもそれらを取り扱えるほど均等に分布しているわけではない、ということである。どのような場合でも頻度高く用いられ、比較的それに接する機会の容易な助詞がある一方で、特定の場面や状況、文章ジャンルに偏っていたり、使用そのものが現代では稀になっていたりと、その機会を逃せばほとんど触れうる機会がない、という助詞も少なくない。すなわち、実際の指導にあたっては、何を、どれだけ、といったことのほかに、その取り扱いのタイミングについても考慮しなければならない場合があることにも留意しておく必要があるといえよう。

このような問題を検討するには、どの助詞が、どのような文章に、どれだけ用いられているかが把握できる基礎的な資料があると便利である。これまでの研究でも、小説3編、評論3編、シナリオ2編に見られる助詞の使用状況から、文法研究における小説の有効性を主張した高橋太郎(1988)、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)と『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)を資料とし、格助詞ごとにその使用実態を記述した丸山直子(2015)、BCCWJに見られる接続助詞の文体的特徴を明らかにした宮内佐夜香(2012)、同じくBCCWJ中の教科書データを用いて複合辞の学年別、教科別使用状況を明らかにした渡辺由貴(2017)、同(2018)などがあり、それぞれ有益な情報を得ることができるが、国語教科書内の文章ジャンルに着目して整理したものはないようである。生徒が共通に触れる文章の中に見られる言語表現をジャンル別に分けて俯瞰してみた場合、そこに、どのような傾向・特徴が見られるのか、また、それはこれまでの研究で指摘されてきたこととどう関係づけられるのかを検討しておくことは、国語教育に資する文法指導のありようを考える上でも意味あることだと考える。

本稿は、国語教育において、何を、どのタイミングで、どのように取り扱うかの基礎資料を作成、提供することを目的として、中学校の国語教科書を対象に、助詞と文章ジャンルの相関を概観しようとするものである。

## 2. 調査の概要

筆者は、前稿執筆時において<sup>2</sup>、光村図書の子国語教科書『国語1』『国語2』『国語3』(平成31年2月5日発行(平成27年3月6日文科省検定済))の計3冊を対象とした簡易な教科書データベースを作成した。本稿でもこれを用いて検討する。中学校の国語教科書を対象とする主な理由は、これも前稿に記した通り、

- 「説明文、小説、随筆、ノンフィクション、詩など、さまざまなジャンルの文章がバランスよく収められており」、助詞の「ジャンルによる使用傾向の差異を見るのに適していると考えられること」。
- 「各教材本文中の言葉も、語彙・文法的にあまり逸脱した表現を含まない穏当なものとして評することができ、それが標準的な表現であるかどうかの判断も比較的行きやすい」と

<sup>2</sup> 杉山俊一郎(2021)。

## 中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

考えられること。

の二点による（杉山 2021）。現在の文法研究では、国立国語研究所が開発を進めている BCCWJ をはじめとする各種コーパスを活用するのが一般的になりつつあるが、本稿では言語量が小規模であるがゆえに、かえって個別の用例の使用状況やその全体像が見渡しやすい本データベースを調査の中心に据える。より大規模なコーパスを用いた検証は、本稿の成果を踏まえた上で設定される課題である。

なお、本データベースに収める国語教科書教材は前学習指導要領（平成 20 年告示）下のものであり、現行の学習指導要領（平成 29 年告示）下において編纂され、本年度（2021 年度）から使用されている教科書とは、取り扱われている教材なども含め、種々の異なりが認められる<sup>3</sup>。しかし、本稿の目的は、飽くまで助詞の使用状況と文章ジャンルとの相関を明らかにするところにある（したがって、特定の教材本文個人の文体的特徴（個人文体）を個別具体的に明らかにしようとするを意図しない）、本稿の考察の範囲内において教科書教材の変更自体が与える影響は小さいと考える<sup>4</sup>。

本データベースは、各教科書収録の教材本文をテキストデータ化したものを形態素解析ツール「Web 茶まめ」<sup>5</sup> にかけて、目視によるエラー修正と、同ツールでは出力されない各種データ（単語の前後文脈情報、出典情報、文章ジャンル、本文種別等）の付与を行なって作成したものである。文章ジャンルについては、教科書目次に掲げられた「詩」「物語」「説明」「随筆」「記録」「ノンフィクション」等のアイコンにしたがい、これを説明的文章、文学的文章、文学的文章（詩歌）に分類している。

上の作業を経て得られたデータについて、各教科書の調査範囲、ジャンル、言語量をまとめたものが次ページの表 2 である。

ここから、調査対象を口語で書かれた資料に絞り、その言語量（語数）を文章ジャンル別にまとめて得た、説明的文章 33,956 語、文学的文章 46,232 語、詩歌 1,751 語が今回直接取り扱うデータの総量となる。

<sup>3</sup> 参考までに、「助詞や助動詞」の指導に関する前学習指導要領と現行学習指導要領およびそれらの解説の異同を確認しておく、以下のものである。前学習指導要領において「助詞や助動詞」の指導は、第 2 学年〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の「イ言葉の特徴やきまりに関する事項」のうち、「(エ) 単語の活用について理解し、助詞や助動詞などの働きに注意すること」に位置付き、その解説編では、「助詞は、単語と単語との関係を示したり、意味を添えたりする働きをもつ品詞である。助動詞は、意味を付け加え叙述を助けたり、判断を示したりする品詞である。このような助詞や助動詞を使うことによって、言語生活の上でお互いの伝え合いたい微妙なニュアンスを、相手によりよく伝えることができることに気付かせるよう指導する。また、日常の言語活動を具体的にに取り上げ、助詞や助動詞が文脈の中でどのような働きをしているかに注意させ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことに役立たせるようにすることも大切である。」(p.61) とある。現行学習指導要領では、「また、日常の言語活動を……」以下の文がなくなり、代わりに「について」「に関して」「かもしれない」「に違いない」などの助詞・助動詞相当の働きをする形式への注意が加わっている点が異なっている。ただし、「助詞や助動詞の指導」という範囲にしばって見る限り、助詞・助動詞相当の働きをする形式への注意をのぞけば、その内容や取り扱いの方針に大きな変更はないと見て良いように思われる。

<sup>4</sup> 例えば、特定の助詞の使用が激増（または激減）、激変するといった可能性は低いだろうということである。

<sup>5</sup> <https://chamame.ninjal.ac.jp/>。

杉山

表2 作品別文章ジャンルの認定とその言語量（杉山 2021 に拠る）

国語1				国語2				国語3			
作品名	ジャンル		語数	作品名	ジャンル		語数	作品名	ジャンル		語数
野原はうたう	詩	P	183	見えないだけ	詩	P	74	春に	詩	P	183
花曇りの向こう	物語	L	1516	アイスプラネット	小説	L	3014	握手	小説	L	3489
ダイコンは大きな根?	説明	E	837	生物が記録する科学	説明	E	2120	月の起源を探る	説明	E	2551
ちよっと立ち止まって	説明	E	830	メディアと上手に付き合うために	情報	E	1374	「想いのリレー」に加わろう	情報	E	1740
詩の世界	詩	E	173	新しい短歌のために	短歌・解説	E	981	俳句の可能性	俳句・解説	E	1082
		P	154			P	112			P	60
空を見上げて	随筆	L	922	短歌を味わう	短歌	E	13	俳句を味わう(俳句)	俳句	P	94
光る地平線	物語	L	2402			P	91	「批評」の言葉をためる	論説	E	1397
星の花が降るころに	物語	L	2131	言葉の力	随筆	L	834	高瀬舟	小説	L	5673
大人になれなかった弟たちに……	物語	L	1860	世界で一番の贈り物	物語	L	3506	挨拶	詩	P	215
シカの「落ち穂拾い」	記録	E	1499	盆土産	小説	L	3953	故郷	小説	L	5486
幻の魚は生きていた	説明	E	1790	字のない葉書	随筆	L	1193	作られた「物語」を超えて	論説	E	2049
竹	詩	P	90	モアイは語る—地球の未来	論説	E	1950	初恋	詩	P	97
桜守三代	NF	E	2907	君は「最後の晩餐」を知っているか	評論	E	2079	エルサルバドルの少女ヘスース	NF	E	2298
少年の日の思い出	小説	L	3881	落葉松	詩	P	225	誰かの代わりに	論説	E	2003
ぼくがここに	詩	P	103	小さな町のラジオ初	NF	E	2330	わたしを束ねないで	詩	P	232
				走れメロス	小説	L	6372				
				科学はあなたの中にある	論説	E	1953				
				鍵	詩	P	244				
合計			21278	合計			32418	合計			28649

E…説明的文章 L…文学的文章 P…文学的文章(詩歌)

NF…ノンフィクション

以下、ここから抽出した口語助詞を中心に用例の分布状況を見ていくが、本稿では、現行学校文法の品詞認定や、それぞれの助詞の意味・用法などを勘案し、「Web 茶まめ」の解析結果に対してさらに表3に示すような修正作業を行なって用例を集計した<sup>6</sup>。

表3 集計にあたっての修正作業一覧

助詞	作業内容	集計から除外したもの
が	・格助詞を連用格と連体格に細分	・ところが が だが (以上, 接続詞)

<sup>6</sup> 作業にあたっては、加藤重広 (2006)、国立国語研究所 (1951)、日本語記述文法研究会編 (2008) (2009a) (2009b)、益岡隆志・田窪行則 (1992)、山田敏弘 (2004)、北原保雄編 (2020)、西尾実編 (2019)、森岡健二・徳川宗賢ほか編 (2012)などを参照した。

中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

の	<ul style="list-style-type: none"> <li>格助詞を連用格と連体格に細分</li> <li>だの を別立て</li> <li>ので のに を準体助詞から別立て</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>への との からの よりの (以上, 連体格助詞)</li> <li>※それぞれの格助詞の中で集計</li> </ul>
に		<ul style="list-style-type: none"> <li>までに (副助詞) ※まで の中で集計</li> <li>のに (接続助詞) ※の の中で集計</li> <li>形状詞・副詞に接続するもの (形容動詞連用形・副詞語尾)</li> <li>それに それにしては それにしても (以上, 接続詞)</li> </ul>
へ	<ul style="list-style-type: none"> <li>へと への を別立て</li> </ul>	
と	<ul style="list-style-type: none"> <li>との を別立て</li> <li>並立助詞を格助詞から別立て</li> <li>とか を格助詞から別立て</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>へと (連用格助詞) ※へ の中で集計</li> <li>形状詞・副詞に接続するもの (形容動詞連用形・副詞語尾)</li> <li>すると それとも かといって とはいえ (以上, 接続詞)</li> <li>なんと なんとか 一人として 一度として 結果として あっという間 (以上, 副詞)</li> </ul>
って	<ul style="list-style-type: none"> <li>副助詞を格助詞として集計</li> <li>だって を別立て</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>だって (接続詞)</li> <li>なんだって (副詞)</li> </ul>
で	<ul style="list-style-type: none"> <li>での を別立て</li> <li>でも を別立て</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>一方で そこで それで それでも では でも ところで (以上, 接続詞)</li> <li>なんで (副詞)</li> </ul>
から	<ul style="list-style-type: none"> <li>からの を別立て</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>だから (接続詞)</li> </ul>
より	<ul style="list-style-type: none"> <li>よりの を別立て</li> </ul>	
まで	<ul style="list-style-type: none"> <li>までに を別立て</li> </ul>	
て	<ul style="list-style-type: none"> <li>ても を別立て</li> </ul>	
たら	<ul style="list-style-type: none"> <li>助動詞た (未然形) を接続助詞として集計</li> </ul>	
なら	<ul style="list-style-type: none"> <li>助動詞だ (未然形) を接続助詞として集計</li> </ul>	
なり	<ul style="list-style-type: none"> <li>接続助詞を並立助詞として集計</li> </ul>	
や	<ul style="list-style-type: none"> <li>副助詞を並立助詞と終助詞に細分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いまや よしや (副詞)</li> <li>やいなや (連語)</li> </ul>
やら	<ul style="list-style-type: none"> <li>副助詞を並立助詞として集計</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>どうやら なにやら (副詞)</li> </ul>
は		<ul style="list-style-type: none"> <li>では それにしては とはいえ (接続詞)</li> </ul>
も	<ul style="list-style-type: none"> <li>並立助詞を副助詞から別立て</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ても (接続助詞) ※て の中で集計</li> <li>でも (副助詞) ※で の中で集計</li> <li>でも けれども それにしても (接続詞)</li> <li>いかにも いつも ぜひとも どうも まもなく なんとも (副詞)</li> <li>かもしれない (連語)</li> </ul>
か		<ul style="list-style-type: none"> <li>とか (並立・副助詞) ※と の中で集計</li> <li>どうか どうにか なんとか もしかして もしかしたら (以上, 副詞)</li> <li>かもしれない (連語)</li> </ul>
し		<ul style="list-style-type: none"> <li>いつしか (副詞)</li> </ul>
しも		<ul style="list-style-type: none"> <li>必ずしも (副詞)</li> </ul>
わ	<ul style="list-style-type: none"> <li>わい を別立て</li> </ul>	
な	<ul style="list-style-type: none"> <li>終助詞を禁止と詠嘆で細分</li> </ul>	
い		<ul style="list-style-type: none"> <li>わい ※わ の中で集計</li> </ul>

### 3. 結果

#### 3.1 格助詞（連用格）

表 4 は連用格についてまとめたものである。

表 4 格助詞（連用格）の使用状況

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
が	900	914	44
の	45	102	4
を	1067	1439	41
に	1071	1350	63
へ	11	86	6
へと	3	2	
と	516	546	18
って	1	15	1
で	327	327	14
から	167	219	3
より	12	34	1

まず、「が」「を」「に」など、文法的な関係を表す格助詞はどのジャンルでも多く使われていることが分かる。「と」「で」なども同程度に用いられている<sup>7</sup>。「から」「より」なども、一見すると文学的文章に多く用いられているようであるが、各ジャンルの言語量を考慮すると大きな差はないと見て良いだろう。ここで、それぞれの助詞の用例数を 1,000 語あたりの出現頻度に換算してみると、表 5 のようになる<sup>8</sup>。

表 5 に拠れば、「が」は文学的文章の出現頻度が若干低く、「を」は詩歌での使用が低く、逆に「に」について詩歌でやや高いようである。「と」「で」については相対的に説明的文章に多い。「の」「から」「より」などは表 4 で見た印象ほどの差がないことも分かる。

「へ」については、説明的文章が少ない。この点はすでに高橋太郎（1988）で、「へ格につ

<sup>7</sup> ただし、それぞれの助詞が表す意味・用法も同程度に用いられているかは別途検討を要する。例えば、「と」の意味・用法を見てみると、文学的文章に 10 例程度見られる、

○ここでいつかまた夏実と花を捨てる日が来るかもしれない。（「星の花が降るころに」）  
 のような〈共同動作の相手〉（「と」いっしょに）と置き換えられる用法）は、今回の調査範囲の限りにおいて説明的文章や詩歌に見出しがたい。逆に、

○この岩石成分が月の材料となる。（「月の起源を探る」）

○科学とは何か。（「科学はあなたの中にある」）

のような〈変化の結果〉や、定義や認識の〈内容〉を表す例は、説明的文章での使用が目立ち、文学的文章や詩歌での使用が少ない（前者は説明的文章 18 例、文学的文章 4 例、詩歌 1 例、後者はそれぞれ 55 例、12 例、1 例）。文章ジャンルと助詞の相関を見る場合には、厳密にはこうしたそれぞれの助詞の意味・用法にまで踏み込んだ検討を行なう必要もあるであろうが、助詞全体の概観を目的とする本稿では、以下意味・用法に関する言及は必要な限りにとどめたい。大規模データによる検証とともに、意味・用法に関するより詳細な調査についても本稿を踏まえての課題とする。

<sup>8</sup> 用例数÷当該ジャンルの総語数（延べ語数）×1,000 で計算。例えば、説明的文章における「が」は、  
 $900 \text{ 例} \div 33,956 \times 1,000 = 26.5$

となり、これを四捨五入して、1,000 語あたり約 27 回の頻度で使用されている、と見る。

中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

いては、評論は、他よりよわいといえそうである」(p.9)と指摘されており、本稿でも同様の結果を得たことになる。次に、説明的文章に見られる11例をすべて挙げる。

表 5 格助詞(連用格)の1,000語あたりの出現頻度

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
が	27	20	25
の	1	2	2
を	31	31	23
に	32	29	36
へ	0	2	3
へと	0	0	0
と	15	12	10
って	0	0	1
で	10	7	8
から	5	5	2
より	0	1	1

①中央の人物が何か言っている。その言葉が、人々の動揺を誘い、ざわめきが広がる。静かな水面に小石を投げると丸い水紋が広がるように、隣の人物へ、さらに隣の人物へと、動揺が伝わる。(「君は「最後の晩餐」を知っているか」)

②震災直後から電気も電話も不通となり、防災行政無線のアンテナも折れ、町内から町内へ、町外から町内へ、町内から町外への情報は全くなくなった。

③私は、町長に頼み、国へ臨時災害放送局の開局を要請する電話をかけてもらった。

④畑仕事の人、散歩中の人、タクシーの運転手、バスを待つ会社員、病院へ行く高齢者、中学生、高校生、そして、長い間不自由な暮らしを強いられている仮設住宅の入居者。

(以上、「小さな町のラジオ初—臨時災害放送局「りんごラジオ」)

⑤衝突から月へ

⑥新たな研究へ(以上、「月の起源を探る」・小見出し)

⑦「批判」から「批評」へ(「批評」の言葉をためる)・小見出し)

⑧野生のゴリラたちは捕まえられて欧米の動物園へ送られた。

⑨実際には見ていないことを、あたかも体験したかのように語ることもできるのだ。それは人の口から口へ、またたくうちに広がっていく。

⑩何気ない行為が誤解され、それがうわさ話として人から人へ伝わるうちに誇張されて、周りに嫌われてしまうことがある。(以上、「作られた「物語」を超えて」)

これらの用例からは、説明的文章における「へ」の例には、

・特定資料に集中すること(「小さな町のラジオ初—臨時災害放送局「りんごラジオ」)5例、  
「作られた「物語」を超えて」3例)

・小見出し部分での使用があること 3例

・「～から...へ」という文型での使用が目立つこと 6例

といった諸点が指摘され、以下に示すような「場所名詞＋へ＋移動動詞」の組み合わせで移動の方向を示す例は少ないことが見てとれる。

⑪ヒロユキをおんぶして、僕はよく川へ遊びに出かけました。

(「大人になれなかった弟たちに…」)

⑫今度故郷へ帰ることになりました。(「握手」・会話文)

このように、説明的文章における「へ」には、単に用例が少ないということとどまらず、用法上の偏りがあることが確認できる。

### 3.2 格助詞（連体格）

次に、連体格の分布を表6に示す。ここでは便宜的に準体助詞「の」もこの中に含める。

表6 格助詞（連体格）の使用状況

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
が		1	
の1	1525	1632	96
の2(準体)	313	479	10
への	14	3	1
との	7	11	1
での	8	2	
からの	4	6	
よりの	1		

「へ」の分布とは対照的に、「への」が説明的文章で多く用いられている。先に見た連用格「へ」の使用とあわせ見てみると、表7のようになり、

表7 「へ」と「への」の使用割合

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
へ	11 (44.0%)	86 (96.6%)	6 (85.7%)
への	14 (56.0%)	3 (3.4%)	1 (14.3%)

説明的文章の中で用いられる格助詞「へ」については、連用格よりも連体格「への」の形での使用が多いことが分かる。これについて、鴻野知暁(2020)では、BCCWJのコアデータを対象として連用格助詞とそれぞれの格助詞に「の」が付いた場合の頻度を調査し、「へ」は約半数が「への」の形で使われる<sup>9</sup>ことを明らかにしている(p.167)。ただし、BCCWJコアデータには「出版書籍(PB)、雑誌(PM)、新聞(PN)、白書(OW)、Yahoo!知恵袋(OC)、Yahoo!ブログ(OY)」などのさまざまなレジスターが含まれており<sup>9</sup>、鴻野(2020)では「への」の使用にジャンル別の異なりがあるかまでは言及されていない。表7の分布は、「へ」「へ

<sup>9</sup> [https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/doc/manual/BCCWJ\\_Manual\\_02.pdf](https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/doc/manual/BCCWJ_Manual_02.pdf).



## 中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

の」の使用が文章ジャンルによっても異なっている可能性を示唆するものである。また、今回の調査範囲では、「での」も説明的文章が他に比べて多いように見えるが、用例が少ないこともあり、今後の調査が必要なところである。この他、「との」「からの」も用例が少なく、「が」「よりの」についてはほとんどない。調査資料中では、「彼らが一つ心でいたい**が**ために」（「故郷」）、「何**よりの**喜び」（「シカの「落ち穂拾い」—フィールドノートの記録から—）の各1例が見いだせるのみであった。

「の」については、表8の通り、

表 8 「の」の1,000語あたりの出現頻度

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
の1	45	35	55
の2 (準体)	9	10	6

連体格助詞と準体助詞とで文章ジャンル別出現頻度の順位が異なるようである。前者は、詩歌>説明的文章>文学的文章となり、後者は、文学的文章>説明的文章>詩歌となる。詩歌の順位が連体格助詞と準体助詞とで全く逆になる点に注意される点である。

### 3.3 格助詞を構成要素とする複合助詞

ここで、格助詞が構成要素となる複合助詞の使用状況をまとめると、表9のようになる。

表 9 格助詞を構成要素とする複合助詞

格助詞	複合助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
を	を介して	1		
	を通して	5		
	をはじめとする	1		
	をもって	2	2	
に	において	5		
	における	3		
	に応じて	1		
	にかけて	3		
	に対して	6	3	
	に対する	4	2	
	について	18	8	
	についての	1		
	につけて		1	
	にとって	15	3	
	によって	34	1	
	により	9		
	による	10		
	によれば			1

	用言+ために	30	12	1
と	といっしょに	2	5	
	とともに	16	8	
	ときたら		1	
	としたら	2	1	
	とすれば	2	1	
	として	43	11	1
	としても	1	3	
	と同時に		1	
	とは(定義)	8	1	
	とはいえ		1	
	が	がために		2
の	のために	6	10	4
	のおかげで	1	1	
	のせいで		1	

複合助詞については、全体的に説明的文章が形式、数ともに豊富と言える。ただし、「につけて」「によれば」「ときたら」「と同時に」「とはいえ」「がために」「のせいで」のように、文学的文章にのみ用例が見いだせるものもあり、「としても」「のために」のように、用例数から言えば文学的文章の方が多く見えるものも若干ある。いずれも用例僅少であり、より大規模なコーパスでの検証が必要であるが、複合助詞の場合も、一概に説明的文章のみが用例の参照に適しているわけではないらしい点には注意したい。

なお、今回の調査範囲では、はじめに引用した『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 国語編』に例示されている「に関して」の用例は確認できなかった。BCCWJの教科書データを調査している渡辺由貴（2017）（2018）に拠れば、「に関して」は国語教科書では小・中・高を通じて使用されておらず、中学校・高校教科書の数学・理科・社会で用いられているものようである。すでに漢字教育や語彙教育の分野で説かれているのと同様に<sup>10</sup>、文法教育の場合にも他教科における言語表現の実態も視野に入れた指導が必要な例と言えよう。

### 3.4 並立助詞

並立助詞の結果は表 10 のようにまとめられる。

「と」「も」「たり」「し」などは同程度、「や」は説明的文章の方が多い。「とか」「やら」「だの」などは文学的文章に偏る。これらは話し言葉的な性格の強い形式であるために説明的文章には用いられにくいのであろう。説明的文章にある「とか」の 1 例は次の通りである。

①今、くるぶしくらいまで積もったよ、**とか**、膝が埋まるくらいになったよ、などと聞き、庭や道路や公園に積もった雪景色を想像する。（「俳句の可能性」）

「か」については、表中一定の用例数があるように見えるが、この中には以下に示すように

<sup>10</sup> 田中牧郎編（2015）、鈴木一史（2019）など。

中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

種々の用法が含まれており、この中のどこまでを並立助詞とするかでその取り扱いも変わってくるように思われる。以下参考のため、本稿が表に含めた全例を挙げておく。

表 10 並立助詞の使用状況

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
と	71	81	6
や	159	40	1
か	24	9	
も	20	25	
に		2	
とか	1	15	
やら		7	
だの		9	
たり	38	24	5
し	10	25	

- 〔「か」が節を承けるもの〕 .....14 例（説明 11，文学 3）
- ②同じ図でも、近くから見るか遠くから見るかによって、全くちがう絵として受け取られるのである。（「ちょっと立ち止まって」）
- ③画面に出てくるリポーターの服装で、寒いか暖かいか推測もできます。  
（「メディアと上手に付き合うために」）
- ④この句には、「どの子」とは誰なのか、風の吹いている場所はどこなのか、現在のことなか、過去のことなか、時間は午前なか午後なか、そのような説明が何も書かれていない。（「俳句の可能性」）
- ⑤ぐうちゃんは、家にいるときはたいてい本を読んでいるか、唯一のタカラモノであるカメラの掃除、点検などを行っている。（「アイスプラネット」）
- ⑥おやじは地道というか堅実というか、行動的だったおじいや、やんちゃなわしとは性格が違うんやけど、桜への打ち込みは半端やなかった。（「桜盛三代」）
- ⑦小さく切り刻むかすり潰すかしたのを、手頃な大きさにまとめてコロケのようにするのだろうか。（「盆土産」）
- ⑧書き写すか、木版印刷しかなかった時代に比べると、情報が早く、広く伝達されるようになりました。（「想いのリレー」に加わろう）
- 〔「か」が節を承けて「～かどうか」の形で用いられるもの〕 .....8 例（全て説明）
- ⑨ただ、知っていてほしいのは、科学は役立つかどうかということを目的とはしていないということである。（「科学はあなたの中にある」）
- ⑩巨大衝突によってまき散らされた月材料物質から、月が形成されるかどうかの実験が行われた。（「月の起源を探る」）
- 〔「か」が名詞を承けるもの〕 .....9 例（説明 5，文学 4）
- ⑪僕は、八つか九つのとき、ちょう集めを始めた。（「少年の日の思い出」）

⑫月に一度か二度，駅から上川君の運転するバスに乗り合わせるのですが，そのときは楽しいですよ。（「握手」）

⑬この黒いマスは，クニマスかヒメマスか。まず，捕れたときの状況を調べることにした。（「幻の魚は生きていた」）

⑭ブッシュだろうか。いや，少し動いた。動物の影だ。シマウマか，ガゼルか。わからないが，確かに何かがいる。（「光る地平線」）

⑮親子か兄弟か，それとも他人か（「月の起源を探る」・小見出し）

〔「か」が名詞を受けて「～か何か」の形で用いられるもの〕 .....2例（全て文学）

⑯「童話か何かの話？」（「アイスプラネット」）

以上の他に「に」があるが，用例僅少で，今回の調査では文学的文章に「捻挫に頭痛に腹痛。」（「花曇りの向こう」）の例が見いだせるのみであった。

### 3.5 接続助詞

表 11 は，接続助詞の結果をまとめたものである。

表 11 接続助詞の使用状況

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
て	1033	1853	72
ながら	23	55	
つつ	2	3	
なり	1	2	
ので	8	49	
から	40	120	
ば	74	82	12
と	87	143	4
なら	15	19	2
たら	10	58	4
に		1	
が	58	130	1
ものの	2	1	
けれど	3	11	
けど / けんど	2	12	
ても	27	55	3
ども		1	
ところで		1	

「て」については，どのジャンルにも多くの用例を得ることができる。1,000語あたりの頻度は，説明的文章 30，文学的文章 40，詩歌 41 となり，相対的に説明的文章での使用が少ないようである。

「ので」「から」については，詩歌に用例がなく，説明的文章と文学的文章で同程度用いられる。二形式間の使用状況という点では，いずれのジャンルにおいても「ので」に比べ「から」の

## 中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

方が多く使われている。

順接仮定条件を表す形式「ば」「と」「たら」「なら」もすべてのジャンルで比較的多くの用例を見いだすことができる。各形式間の使用状況を見ると、表 12 のようになり、

表 12 「ば」「と」「たら」「なら」の使用比率

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
ば	74 (40.0%)	82 (27.3%)	12 (54.5%)
と	86 (46.5%)	142 (47.3%)	4 (18.2%)
たら	10 (5.4%)	57 (19.0%)	4 (18.2%)
なら	15 (8.1%)	19 (6.3%)	2 (9.0%)

説明的文章と文学的文章とで「と」の出現率が最も高い点では同じものの、「ば」と「たら」の出現率が異なっていて、文学的文章の方が「たら」の出現率が高いという結果を得る。中島悦子 (2007) は、自然談話における「と」「ば」「たら」「なら」の分析を、雑誌 90 種を対象とした国立国語研究所 (1964) の調査結果と対照させながら、書き言葉では「と」が多く、話し言葉では「たら」が多いことを指摘している (p.156)。これにしたがえば、説明的文章にも文学的文章にも「と」の出現率が高いのはこれらが書き言葉であるから、文学的文章に「たら」が多いのは話し言葉的な表現が影響しているから、と解釈することができよう<sup>11</sup>。また、詩歌では「ば」の出現率が最も高く、上の 2 ジャンルとは異なった傾向を見せている。文章ジャンルによって形式の選択が異なっている可能性が指摘できるかと思う。

逆接条件を表す「が」「ど」「けれど」「のに」「ても」などは、文学的文章にまとまった数が見られるが、用例が少ないこともあり、今回の範囲では他ジャンルとの差を確かめられない。

### 3.6 副助詞

副助詞の分布を表 13 によって見る。

副助詞については、全体的に詩歌での使用が少ない他は、取り立てた差があまり見られない。説明的文章に多いものには「こそ」「ほど」「など」があるが、用例が少ないこともあり、今回の調査結果からその差を指摘することはできない。

形式のバリエーションという点では、文学的文章が相対的に豊富である。文学的文章には、「だって」「とか」「なんか」「なんて」といった話し言葉的な性格の強い助詞が使われるためである。

<sup>11</sup> なお、同書では小学校 5、6 年、中学校、高等学校 1 年の国語教科書 (学校図書, 1984, 1985) の調査結果が示されているが、その割合は「と」208 例 (40.5%)、「たら」141 例 (27.4%)、「ば」108 例 (21%)、「なら」57 例 (11%) とされている。本稿表 12 に拠って、ジャンルを超えた総数のみで比率を示せば「と」231 例 (45.8%)、「たら」71 例 (14%)、「ば」168 例 (33.1%)、「なら」36 例 (7.1%) であり、特に「たら」と「ば」の使用率が相当異なっている。その差が何を意味するかは今後の課題である。

また、副助詞の分布で注意されるのは、「だに」「すら」「さえ」「のみ」「きり」「ぞ」のように、用例僅少のものが多いことである。この中には、副助詞を取り扱う際に例示されることの多い「さえ」も含まれているが<sup>12</sup>、使用頻度という観点から見ると、実際にはそれほど多く用いられている形式とはいえない。指導の際には注意が必要であるように思われる<sup>13</sup>。

表 13 副助詞

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
は	999	1573	48
も	299	360	14
こそ	11	6	3
ぞ	1	1	
まで	44	72	5
までに	7	7	
だって	1	14	
でも	30	57	
すら	1		
さえ	1	6	
だに		1	
ばかり	14	29	
だけ	39	73	6
のみ	1	2	
しか	9	8	1
きり		2	1
ほど	28	24	3
くらい	12	24	
とか		4	
など	55	23	
なんか		10	
なんて		10	
か	38	73	5
ずつ	6	9	

- ①彼と我との相違は、いわばそろばんの桁が違っているだけで、喜助のありがたがる二百文に相当する貯蓄**だに**、こっちはないのである。（「高瀬舟」）
- ②壁に描かれた部屋は、あたかも本物の食堂の延長にあるように**すら**見える。  
（「君は「最後の晚餐」を知っているか」）
- ③王は、民の忠誠を**さえ**疑っておられる。（「走れメロス」）
- ④私たちは、ひと目見たときの印象に縛られ、一面**のみ**をとらえて、その物の全てを知っ

<sup>12</sup> 中学校の国語教科書では、光村図書をのぞく3社が、文法コラム内で「さえ」を取り上げている。

<sup>13</sup> これは念のために言えば、用例がほとんど用いられないから重要度が低いということを言おうとするものではない。重要度は目的によって変わりうるからである。例えば、文章読解においては、これら副助詞の機能を理解しておくことがより深い本文解釈に至ることもあるであろう。この場合は、触れる機会が少ないからこそ、機会を見て取り扱っておく必要がある、という意味で重要である。

## 中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

たように思いがちである。（「ちょっと立ち止まって」）

⑤私には、ばあさんがどれだけのことを見たのだからわかりませんが、ばあさんはあつと言ったきり、表口を開け放しにしておいて駆け出してしまいました。（「高瀬舟」）

⑥これぞまさしく三十年前のレントウであった。（「故郷」）

### 3.7 終助詞

最後に、終助詞の分布をまとめた結果を表 14 に示す。

表 14 終助詞

助詞	説明的文章	文学的文章	詩歌
の	5	4	
わ	14	3	
わい		2	
つけ		1	
か	102	147	7
な 1 (禁止)		5	
や	1	4	
よ	8	79	1
(だ) もの		3	
かしら		2	
な 2 (念押・詠嘆)	12	37	
ね	5	46	
さ		12	
ぜ		1	6
ぞ		18	
い		11	

終助詞についても文学的文章が形式のバリエーション、数ともに豊富である。これは、副助詞と同じく、それらの話し言葉的な性格が影響しているためと考えられる。

「か」については説明的文章での使用も多いが、そこでは読者に「問い」を投げかけるような形で使用される疑問表現が 48 例 (45.7%) と約半数を占めており、用法的に文学的文章とは異なっている。

①ペンギンは、本当にこれほど深く、長時間、潜ることができるのだろうかか。

（「生物が記録する科学—バイオロギングの可能性—」）

②それにしても、ラノ・ララクの石切り場から、数十トンもあるモアイをどのようにして海岸のアフまで運んだのだろうかか。（「モアイは語る—地球の未来」）

③月とは、いったいどのような天体で、どのようにして誕生したのだろうかか。

（「月の起源を探る」）

やや注意が必要なのは、「の」「わ」「や」「よ」「ね」「な 2」などが説明的文章に出てきていることである。これらは、

- ④今、くるぶしくらいまで積もったよ、とか、膝が埋まるくらいになったよ、などと聞き、庭や道路や公園に積もった雪景色を想像する。（「俳句の可能性」）
- ⑤「私も嫌い。いまいちだよね。」（「批評」の言葉をためる）」
- ⑥「そうかも。でも、その単調さで、かえって歌詞のよさが伝わるんじゃないかな。」  
（「批評」の言葉をためる）」

のように、会話文中の用例がほとんどなのであるが<sup>14</sup>、ノンフィクション中の会話文には、以下の通り、方言や女性語として機能する助詞が含まれている。

- [方言話者の発話] .....「わ」13 例、「な」2」10 例
- ⑦桜も子供も本来、自分で育つ力をもっとるんですわ。（「桜守三代」）
- ⑧わしらが家業に精出しておったから、おやじものめり込めたんやな。（「桜守三代」）
- [女性語] .....「の」3 例、「わ」1 例
- ⑨週一回、夜の学校に行けるようになったの。（「エルサルバドルの少女ヘスース」）
- ⑩まだ幼かった私は、食べるのが好きだったから、そんなときはつらく感じたわ。  
（「エルサルバドルの少女ヘスース」）

ここから次の二点が指摘できる。第一に、ノンフィクションには、インタビューが含まれることがあるために、他の説明的文章では出現しにくい方言や女性語を認めることができること、第二に、⑨⑩から知られる通り、ここで用いられる女性語は、実際の少女がそのように発言したものを忠実に再現したものではないこと、言い換えれば、ここで用いられる「の」や「わ」は、翻訳を通して付与された役割語であるということである<sup>15</sup>。すなわち、終助詞の分布について言えば、ノンフィクションには、役割語のような、一般的な説明的文章とは異なった、文学的文章的な特徴が反映されることがあることが確かめられるのである。

#### 4. おわりに

以上、本稿では中学校国語の検定教科書における助詞の分布を概観した。それぞれの助詞の分布の背景にはさまざまなものが考えられ、その傾向を一口にまとめることは難しいが、少なくとも、はじめに述べたように、助詞にはどのジャンルでも用いられるものと、ほとんど用いられない、または特定のジャンルに偏るものがあり、後者にはまた役割語のような現代語話し言葉とは性格を異にするものが混在することの具体は示し得たと思う。また、説

<sup>14</sup> 例外として、筆者（池上彰）が読者に向かって直接語りかける形式を取る以下の1例がある。  
○いっぽう、長所として、新聞は、紙のページをめくことで、さまざまなニュースを一度に知ることができます。ひと目で全体がわかるという「一覽性」があるのですね。  
（「メディアと上手に付き合うために」）

<sup>15</sup> 金水敏（2003）に拠れば、役割語の定義は以下の通りである。  
ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。（p.205）



## 中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

明的文章における格助詞「へ」「への」や並立助詞「か」の意味・用法、複合助詞「に関して」や副助詞「さえ」の分布のように、その使用実態が必ずしも典型的なイメージとは重ならないものがあることも本調査により確認することができた。

さて、こうした基礎資料は、実際の国語科の授業改善・促進に、どのように貢献しうるだろうか。最後にこの点について考えてみる。

第一に、使用頻度に基づく文法項目の検討に役立てることができる。これは、最も単純には、「高頻度のものは学習の重要度が高く、低頻度のものは重要度が低い」といった、使用頻度による重要度の選別といった点での活用が考えられる。また一方で、逆に低頻度であってもそれ以外の価値基準によって学習の重要性が認められる助詞について、それがどのような文章に現れるのかを事前に把握しておく資料としても使うことができる<sup>16</sup>。使用頻度が低いということは、それだけ実例による学習の機会が限られているということでもある。

「少ないまたは稀」であることを把握しておくことで、読解の中で取り扱う際には機をとらえた指導につなげられることがあるだろうし、また、作文指導の中で取り扱う際には用例を補完したり、説明を厚くしたりするなどの事前準備にも資するところがあるだろう。さらに、作例による文法指導を行なう際にも、これらのデータを踏まえることで、より効果的な文例の提示が可能になると期待できる。例えば、助詞の「意味を添える働き」について学習する場合、その文例に用いられる助詞は使用頻度が低いものよりも高いものの方が、生徒の共感・理解も得やすいであろう。

第二に、生徒がこれまでにどのような言語表現に触れてきたのかを推し量るための資料として活用する可能性が考えられる。例えば、作文指導の際、そこで取り扱われる文法事項が、生徒のそれまでの経験の中でどれだけ接触する機会がありえたのかは考えてみなければならない問題だと思う。なぜなら、「書く」ためには、それ以前にモデル（知識）の獲得が必要であり、そうした機会がなかった場合には、教師の指導内容や意図が十分には伝わらない可能性も考えられるからである。作文指導においてより効果的な指導を行なうには、生徒がそれまでに触れえたであろう言語表現を想定し、未知・未習の可能性が高いものを事前にピックアップしておく必要があるだろう。そうした、いわば言語表現への接触機会を考えてみる一つの指標として、各助詞の使用状況や文章ジャンルによる意味・用法の偏りを示した本データを活用することができる<sup>17</sup>。

第三に、個々の文法項目や意味・用法にも「目的やジャンルに応じた書き方の違いがある」という観点（文体的観点）を取り入れた指導の基礎資料として、本データは資するところがあるだろう。書き言葉には、日記、物語、エッセイ、説明文など、目的やジャンルによる書き方（文体）の違いがある。そうした違いが具体的にどのような点にあるのかに気づかせ、

<sup>16</sup> 例えば、「さえ」や「のみ」のように、実態としてはそれほど頻繁に用いられるものではなくても、その助詞の意味・用法に触れておく方が、文章読解の際に有益と判断される、といったような場合である。

<sup>17</sup> もちろん、生徒の読書経験はさまざまであり、中学校国語教科書というごく限られた範囲だけで言えることは少ないが、しかし、すべての生徒が接触機会を持ちうる教科書だからこそ、その範囲内で検討してみることに一定の意味はあるものと考えられる。

意識させることは、読解指導、作文指導のいずれにおいても重要である。例えば、作文指導において、「やら」や「だの」は説明的文章には使わない、「たら」よりも「と」の方が説明的文章には適している、といった文体的な注意は、個々の作文を添削する段階で単発的に行なうことも多いと思われるが、そうした文体への意識付けは、できれば日々の読解指導や文法指導の中でも積極的に行なっておきたいところである。このような文体的観点を取り入れた読解指導や文法指導を視野に入れたとき、各言語形式（意味・用法を含む）の、文章ジャンルによる偏りや、使用状況の傾向差があることを示した本稿のようなデータ集が基礎資料として活用できるのである。

とはいえ、本稿で示したデータは中学校国語教科書というごく限られた範囲での結果に過ぎない。各助詞のより詳しい意味・用法に踏み込んだ記述、校種別・教科別の教科書の調査、話し言葉をはじめとする他の性格を持ったコーパスとの比較など、より大規模な検討はすべて今後の課題である。

## 文 献

- 加藤重広（2006）『日本語文法 入門ハンドブック』研究社。
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。
- 北原保雄編（2020）『明鏡国語辞典 第三版』大修館書店。
- 国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版。
- 国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語・用字 第三分冊』秀英出版。
- 鴻野知暁（2020）「パソコン言語学（コーパス言語学）」『日本語ライブラリー 現代日本語文法概説』朝倉書店,157-168。
- 丸山直子（2015）「コーパスにおける格助詞の使用実態：BCCWJ・CSJにみる分布」『計量国語学』30巻3号,127-145。
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法：改訂版』くろしお出版。
- 宮内佐夜香（2012）「接続助詞とジャンル別文体的特徴の関連について：『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を資料として」『国立国語研究所論集』3,39-52。
- 文部科学省（2018a）『中学校学習指導要領（平成29年告示）』東山書房。
- 文部科学省（2018b）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』東洋館出版社。
- 森岡健二・徳川宗賢ほか編（2012）『集英社国語辞典 第3版』集英社。
- 中島悦子（2007）『条件表現の研究』おうふう。
- 日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法⑥ 第11部複文』くろしお出版。
- 日本語記述文法研究会編（2009a）『現代日本語文法⑤ 第9部とりたて 第10部主題』くろしお出版。
- 日本語記述文法研究会編（2009b）『現代日本語文法② 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版。
- 西尾実編（2019）『岩波国語辞典 第八版』岩波書店。

## 中学校国語教科書から見た助詞の分布と文章ジャンルとの相関

- 杉山俊一郎（2021）「中学校国語教科書から見た助動詞と文章ジャンル：小規模コーパスを活用した文法用例集の構想と検証」『信大国語教育』30,45-58.
- 鈴木一史（2019）『国語教師のための語彙指導入門』明治図書.
- 高橋太郎（1988）「文法資料としての文学作品：文法形式のゆたかさの面から」『国文学 解釈と鑑賞』53 巻 7 号, 6-18.
- 田中牧郎（2015）『講座日本語コーパス 4 コーパスと国語教育』朝倉書店.
- 渡辺由貴（2017）「BCCWJ 国語教科書データにおける複合辞の学年別使用状況：国語教育での指導の可能性」『早稲田日本語研究』26,1-12.
- 渡辺由貴（2018）「BCCWJ 教科書データにおける複合辞の教科別使用状況：国語教育を視野に」『国立国語研究所論集』15,195-210.
- 山田敏弘（2004）『国語教師が知っておきたい日本語文法』くろしお出版.

### 付 記

本稿は令和3年度 JSPS 科研費（課題番号：21K13014）による研究成果の一部を含んでいる。また、執筆に際して匿名査読者の先生方から有益なご指摘を賜った。記して御礼申し上げます。

(2021年 9月30日 受付)  
(2022年 3月 1日 受理)